住空間構成に適する用具の研究

工業技師　田　原　健　次

1. 目　　的

現代の住居様式の傾向と状態を検討する場合，これに合致する道具の少ない事を痛感させられる。

ここに研究対象として今日，団地に始まり大量に作り出される規格化住宅，いわゆる２ＤＫ－３ＤＫ等の小型住居様式の住空間に適する用具（家具）のデザイン研究を行う事とした。

その方向として，室内の空間を充分に活用し，機能性に基づく多用途性のあるもの，即ち合理的で使い易いものであるという条件を前提とするものである。

2. 概　　要

住いと道具の関係の今日の問題点を取り上げて，これにより研究目的に合致出来るような具体的設計内容を列記すると，

ａ）住いのための道具の数は，人間が生活を営む以上，必然的に増加するが，道具本来の目的である人間の機能の一部を代行し，その機能を一段と高めるべき道具が，ヒューマンタッチの精神を忘れたかのように，物質文明の洪水の中に，がむしやらな方向による道具の増加が多くの現象と見受ける。

　即ち，道具相互間，道具と住いの間に新しい関係が見い出されないという現象ではないかと考える。

そのため，生活を豊かにするはずの道具が住空間の破壊者となり，住空間を混乱させていると言えよう。言い換えるなら，この原因によつて道具と住いとを結び付けるシステムの不在が浮彫りになつて来る。

ｂ）現状はこの様なシステムの不在の中に，多くが更生産（無秩序で住いと道具の新しい秩序の見い出されないままのモデル・チエンジ）が進められている。この事は，価値の混乱を深め，生活環境改善の方向性を持たない使い捨ての様な感じの道具の生産と消費であり，ともすると生活設計の見通し迄も，立てにくくさせられようとしている。

ｃ）かくして，これらの混乱は，物質的面から精神的面までも影響を与える原因となる。

ｄ）以上，考えられる諸件から，住いの中のプロダクト・デザインとしての道具は，次の諸点が指摘され，改善が進められるべきであり，一つの方向を示唆するものと考える。

１）美的感覚として，今日考えられているような一般化されている様なセンスを前提として，住空間を損うものであつてはならない。

２）このシステムは，今日の進化した住居様式の生活要素を機能的に取り入れ，構造的にも使用者の目的に応じて容易にＵＮＩＴ出来るものが望ましい。

3）このシステムの中心は，プロダクトデザインに立脚している以上，量産性に基づく，経済的条件が考慮された開発が必要と考えられる。

以上の諸点を考慮した結果，具体的に取り上げるものとして最も用途の広い棚を選定した。（図－1）が，このデザインであり，（図－2）の単体を基本形として，UNIT展開させられるものである。尚展開例は（図－3）による。

3. 設計仕様

上述の考慮による設計仕様は次のとおりである。

a．多目的，機能性を持たせる。

b．UNIT展開は，5例以上を考慮する。

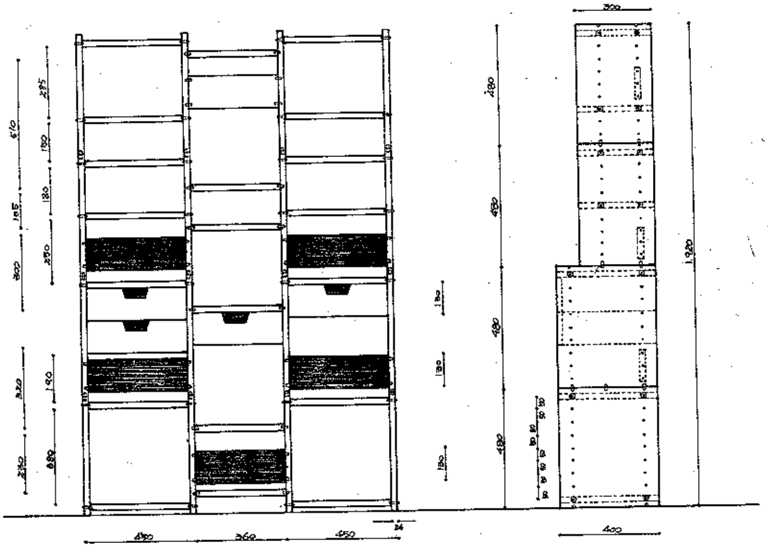
c．木の「柔」を生かす。

d．作業工程の単純化による合理的生産手段の確保。

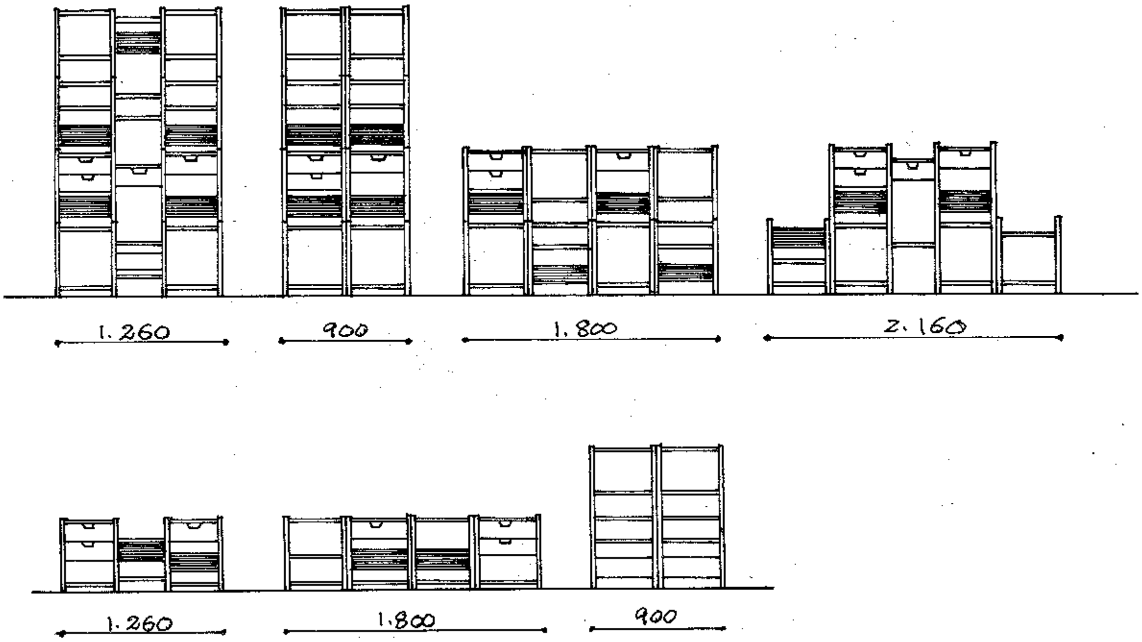
e．構造部は簡略化を図る。

f．治具等はコスト・ダウンを図る為，市販治具を使用する。

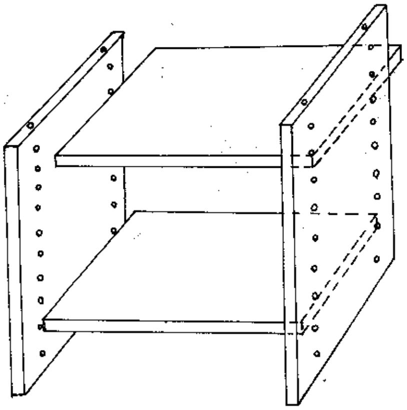
g．重量軽減を図る。

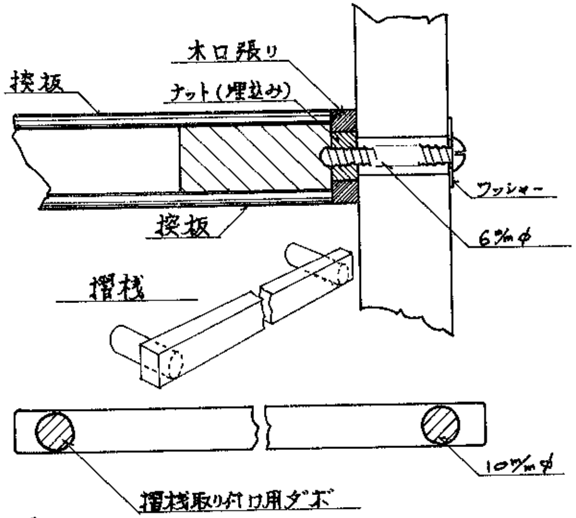


図－3

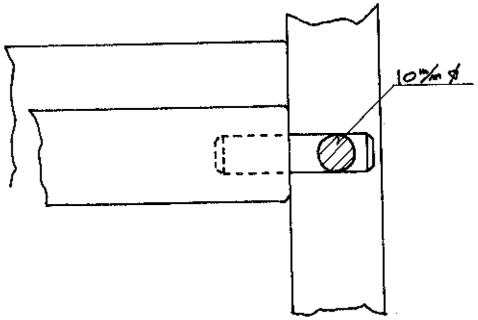


図－2（基本単体）

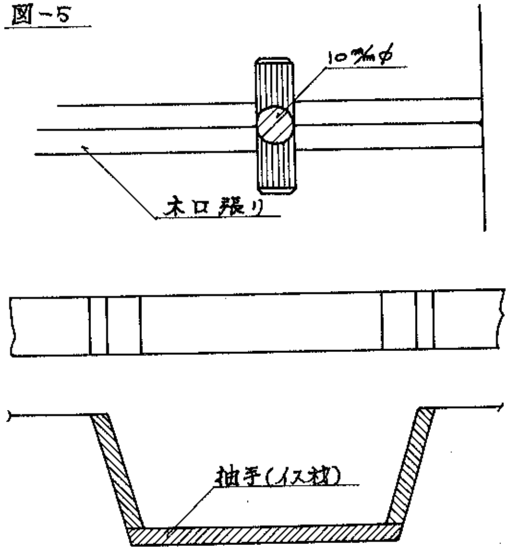




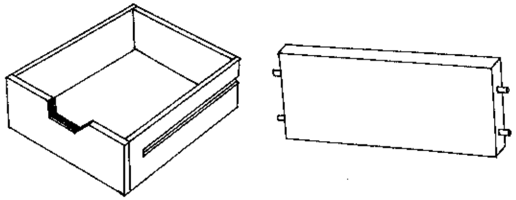
図－6



図－5



図－7（抽出し 腰板）



4. 考　　察

設計仕様別に考察を行いたい。

まず，a）であるが，棚としての多目的用途は所期の考え方を実用化出来たと考える。即ち，用途は飾棚，本棚，書棚，食器棚，等，極めて広く，一体による展開を5例以上考慮出来る事は，一応，機能性を発揮出来たものと考える。

たゞ，e）とも重複するが，構造部にダボを使いた為，スタツク展開がスム ースに行かないのが大きな難点であつた。実際ダボ使用は，木の狂い等のため極めて労力を必要とする事になり，失敗だつたといえる。

これは継続研究品であるので次回は，これを鍵盤状など，もつと易しく，スタツク出来るものを考えて行きたい。

次に，c）についてであるが，いこいの場であるべき家庭は全てが暖い雰囲気であるべきであり，最も生活上重要な事であるが，この精神的要素のはいる問題をメカニツクな中にも，充分，「木」を使用したため，これは難点のないものとして言える。

たゞ，塗装技術，塗料等の色調に問題があると思われる。即ち，地味にという考え方が極端になり，若干明るさを感じないところが，満足の持てないところであり，次回の試作には，この件を充分考慮させて行きたい。

4番目の，作業工程の合理化であるが，構造的にも技術的には，極めて当り前の設計を行つた為，難点はなく図参照でも分るが，量産性のあるものとして，開発出来る確信を得た。

多目的性格を持たせる以上，構造体は使用者を充分考慮して易しい構造とするのが常道であろう。

fの治具の件であるが，図を参照すれば分る如く，市販されているボルト・ナツトを使用し計画通り進める事が出来た。gについては，コア一利用によるフラツシユ構造で，感じられる重量より，はるかに軽減され，一人で充分展開出来，一応，重量的には難点はないと考えられる。尚，もつと徹底化させる為には，木厚25%を18%ぐらいまで落せば子供でも楽々と展開出来ようし，次回試作には参考としたい。

最後に，美的問題であるが，これは商品価値をより左右する問題だけに非常に難しい。

一応，今回はメカニツクな要素を基本に展開したが，若干，洗練さに欠ける点があるので面の処理等に研究を重ね，今後の試作に展開したいと考える。

考察は，以上によるが，所期の目的は六割方達成出来たと考えられるが，残る諸欠点を次回の試作品に持越し，業界へ充分説得出来る作品の開発を行い，本県，木材工業製品の質的向上に役立てたいものと考える。

図－1